

怒りの像

石原慎太郎

りの 像

石原慎太郎

サンケイ新聞社

怒りの像

石原慎太郎

昭和45年2月20日1刷

定価 三五

発行者

竹内

格

印刷

株式会社

印刷所

製本

有限会

蔵

発行所

サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一丁目七(103)
大阪・北区梅田四丁目(103)

乱丁・落丁本はおとにかえいたし

© 石原慎太郎 (1970)

Printed in Japan

0293-070556-1756
102616

蔵書

目次

遺書	7
遺書受取人	14
兄	21
鉄工所	28
寛二	35
弟	42
説得者	48

美奈子	竹村の報告	黒幕	凱旋	支払証	裁判	本番	緒戦	雨の夜	叔父	海の声
-----	-------	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----

123	117	110	103	96	90	83	76	69	62	55
-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----

取引	130
少女	136
千春	143
説得	150
二人	156
体育館で	162
松木からの手紙	169
会见申込み	176
博徒	182
襲撃	189
捕り虜	195

志願兵

新企画

桜運送

徹夜

陰謀

挫折

決勝戦

破綻

千春の死

出発

202

209

215

222

228

235

242

249

256

263

怒 り の 像

遺書

搜索はかつて行われたいつの時よりも広範囲に、徹底に行われた。徹底的と言っても人間の通る道もない熱帯の広い密林の中をあてもなく捜し廻る作業の限界は知れてはいた。まして捜す相手が実際に存在するのだとしたら、相手は捜す方の人間と同じ人間なのだ。こちらが動けば、相手も動くだろう。

搜索も一週間目になると、どうやら無駄骨だったことが知れて来た。南太平洋の孤島であるこのG島の密林に生残って隠れていると言う日本兵の噂はどうやら矢張り噂であつたらしい。今度の搜索のきっかけになつた密林の近くを走る軍用道路で彼らを見たという在島アメリカ軍の軍曹の報告もどうやら眉唾まゆつばになつて来た。

人の噂だと、それを報告した当人は日頃も嘘うそつきの

大酒のみで、彼らを見たと言う夕方方も酔っぱらつていたそうだ。しかし、当の軍曹は、少くとも搜索隊と話し合う時は、しらふで、頑として島の自分の見たものについての報告をひるがえしはしなかった。

搜索隊としては、その度、新しい期待と希望をもつて再び密林にわけ入るのだが、結果は同じだった。

しかし、現に、この搜索にすすんで参加した大井、島村の二隊員は、今から二年前、この島で十五年間密林に隠れて生きつづけ、挙句あげくに捕えられた生残りの日本兵だったのだ。

他の搜索隊員には道無きに見える密林も、彼ら二人のかつての経験から見れば、動物の、或いはこのジャングルにひそんでいるかもしれない生残り日本兵の通い道だった。

二人の先導で搜索隊は文字通り道無き道を極めて虚しい搜索をつづけて来たのだ。

「誰かいるか。俺たちは疾風兵団、二〇三部隊の大井伍長と島村上等兵だ。俺たちも三年前までこの密林に隠れていた。戦争はもう十八年前に終わった。日本と米

国は休戦の条約を結んで今は友だちだ。出て来ても、米軍や原住民はお前たちを虐待はしない。この旗をかかげた樹の下に、日本の新聞を置いていく。早く出て来い。故郷ではみんながお前たちの帰って来るのを待っているぞ」

ハンドマイクロホンから密林に連日同じ声が響いては聞えた。

予定の十日間の内七日が過ぎた時、

「どうやら、誰も残ってはおらんようですね」

うつ向いて島村が言った。

実際、当てもなく密林に叫んで彼らのために置いていった新聞やその他の資料は、時経て戻って来て見ても、どれも手つかずにそのまま置かれてあった。

島村や大井の経験から、他の隊員にはわからぬ密林の細部を調べて廻った結果も、それら他の日本兵がこの密林に生活していると言う形跡はどこにも無かったようだ。

「しかし、まだ三日ある」

あきらめ切れぬように大井は言ったが、他の隊員に

は先の搜索の結果はもう知れたものに感じられた。

天幕の中で七日目の夕飯を食べながら、みんなが隊長格の北原記者の顔を見た。

北原としてもそれに向って、

「とにかくまだ三日ある」

と言うよりなかった。

今度の搜索は、G島からの報告をもれ聞いてそれを真っ先に報道した東日新聞社のキャンペーンで行われている。隊長格でやって来た北原記者としても、いくら先は見えているとは言え、ここで放り出して帰る訳にはいかなかった。社としても、キャンペーンした手前、なんとしても生残りの日本兵を発見救出したいところだ。

最近一二のスクープで競争紙に出しぬかれた東日としては何とかこの特種をものにしたかった。そのため力の入れ方もひとしおで、社会部デスクの北原がわざわざ腰を上げて出かけても来た。

出発する前、

「北原さんのことだ。日本兵がいなけりゃゴリラでも

つかまえて生残り日本兵にしたてて帰ってくるんじゃないですか。向うで芸を仕込んで」

若い記者が冗談に言っていた。

二日おきに軍の設備をかりて、東京の社に連絡をしているが、今朝方受けとった返事も、
「発見に全力をつくせ」だった。

しかし、大井、島村二人に先導された搜索隊の連日の努力を眺めていると、それ以上の搜索は望まれようもないということがよくわかった。そしてその搜索で出て来る結果はまず百パーセント信じていいだろう。

北原自身にしても、大井、島村の二隊員ほどではないにしても、この搜索には彼個人の祈りのようなものがある。戦争中運悪く中支からビルマ、そして南太平洋と転戦させられた北原は、短期間だが、正式の配属を待ってこの島にいたことがある。そしてここから渡ったさらに南方のI島で北原の部隊は孤立し、大半が戦死し、生残った彼らは最後の必死の逆襲に備えている内、敵の奇襲に会って捕虜になった。捕われ、丸裸にされたまま荒い檻の中に食糧もろくに与えられず丸

三日放っておかれた間中、みんなはいっせ檻を囲んだ監視の重機の火が吹いて、そのまま皆殺しにされるかもしれないと覚悟しつつけた。

敵の補給艦がやって来、北原たち捕虜に毛布と十分な食糧が補給された時、安堵のショックで急死した兵隊もいた。その男の髪の毛がその三日間の内に真っ白に変っていたのを北原は覚えている。

あの経験からすれば、敵に捕われることを怖れて密林に隠れつづけているかもしれない日本兵、いや、現にここにいる大井、島村のように過去十五年間、このジャングルに自分だけを信じてひそみ続けていた人間の気持は痛いようにわかるのだ。

搜索の途中、過去に数度遺骨の採集団がたち寄ったとはいえ、密林の方々で発見された日本兵の遺骨や遺品を、その度、北原は自分の体の部分の骨を拾うような感慨で手にし、祈りをこめて収め込んだ。

七日目の夜、天幕の毛布の中で睡りにつく前、北原は明日からの搜索を殆ど希みのない日本兵の発見か

ら、遺骨遺品の採集に切り換えようと決心した。

それがせめても多くの人間たちの期待の上に時間と経費をかけ、はるばる出かけて来たこの企てを意義あるものにするよすがだと彼は思った。

翌八日目の朝、北原は昨夜心に決めたことをみんなに言い渡した。

「勿論、今後何か有力な手がかりでもあれば、時間を十日に限らず、それが極めつくされるまで残るつもりです」

言われて誰もこだわる人間はいなかった。天幕をたため、みんなは連日と同じように、厚い密林の中に踏み込んでいった。

その洞窟が発見されたのは九日目の昼すぎだった。

密林の中にあつた小さな流れの源をたどってジャングルの中の険しい断崖の下に湧き水を見つけ、険しいその岩山の裾を巡っていく内、朽ちて倒れた大木が入口を塞ぐようにしていた、岩と岩との狭間の奥の小広い洞窟を島村が見つけたのだ。

岩棚まで数人が上り、火を点し、期待をこめて中へ伝つて入ったが、最近そこに人が住んだ形跡は全くなかった。

ただ一番奥の、六畳ほどの穴の中にかつてそこに住んでいたらしい数人の日本兵の遺品が、後からいつかやつて来るだろう搜索者の手を待つようにきちんと置かれてあつた。

原住民の話では、先年やつて来た遺骨採集団は、この断崖の麓で数体名の知れぬ遺骨を発見して帰つたそうである。

或いは彼らはそこで最後の戦鬪で倒れたか、或いは崖の上から飛び降りるかして自決したのかもしれない。

洞窟の中は乾燥してい、遺品は長い年月置かれたままにもかかわらず、それほど損われずにいた。

名前の入った水筒、鉄かぶと、背囊、そして一番隅に置かれてあつた飯盒の中に署名の入った手帳が収められてあつた。

開いた手帳にはしみてにじんでいたが、鉛筆で克明

に記した日記がまだはっきりと読めた。記したのは疾風兵団二〇六部隊十二分隊石倉静雄、とあった。

かざした明りの下でその日記を開いて読みながら、北原はうめいた。

それはなんと言おう、彼が久方に感じた強い感動、と言うより狂おしいほど熱い共感だった。

孤島の密林に周囲との連絡を断たれて孤立した日本兵が、怖れ、焦り、迷いながらも最後の勇をふるって必死に自分を立て直し、せまり来るものに立ち向おうとしている、その肉体と心の記録が、短い字句に刻みつけられてあった。

知らずに北原は声をあげてそれを読んでいた。声は狭い洞窟の内に反響し、時は断絶した時間を一挙に飛び越えて二十年前に戻っていた。字句の切れ目にふと気づいて声なく置かれたそれらの遺品を見直した時、せまってくる鬼氣の内に尚、北原は自分が自分自身の最も深く大きな記憶にいましつかりと繋つながれるのを感じていた。

『——第三泉地区の小隊は全滅せしか、銃声全く聞えず。友軍の銃火日々に薄し。我分隊孤立したり。敵軍の刻一刻近づくを感ず。』

『——敵襲未だ無し。頭上を敵機大編隊北上して過ぐ。我を過ぎて向うところはいずこそ。我は完全に孤立したり。』

『——午後五時、前方千米の地点に敵斥候見ゆ。敵襲近し。我が玉砕も間近なり。』

『——夜間、照明弾頭上に上る。加賀上等兵発見せらる。』

敵襲あるべし。我が玉砕、明日なるべし。

玉砕に臨んで言うことなし、我らが死の、祖国を護るにいくばくのよすがたるを祈るのみ。

転戦のまま祖国を離れて三年、故国の山河今いかにありや。

博子、昨夜もまたお前の夢を見た。お前はあの、青い小紋の羽織を着ていた。

洋一、寛二は元気なりや。出征の後生れた寛二の顔

を知らず。寛二もすでに三歳、顔を知らぬ父について問うこともあろうか。

洋一、寛二、父は死に臨んでただわびるのみ。お前たちには、結局、何もしてやることが出来なかった。この無力の父を許してくれ。父の亡き後は、何よりも母を大事にすること。父の分と思いて母に孝行を尽すこと。お前たちに願うことはそれだけである。

さらば、日本よ。懐しい祖国よ。永遠に美しくあれ。故国の若き女たちよ、気高く美しくあれ。祖国の若き男たちよ、雄々しくたくましくあれ。

匹夫の我の死の、柱となりて故国を護らんことを』

日記はその遺書で終っていた。北原は声をのみ、閉じた手帳を握りしめた。

この人知れぬ洞窟の中から、何千里の海をへだてて遠い祖国に語りつづけていた遺書の声を、自分が今確かに預って海を飛び越え帰ろうとしていることを、彼は洞窟の中で声一杯に叫びたい衝動にかられていた。

代りに骨を抱くように、遺書の収められていた飯盒をしっかりと彼は抱きしめてやった。

ほら穴を脱け、再び陽なたの下に戻った時、北原は自分の体の内に、まだ錯綜して在る時間を感じていた。彼にはふと、たったいま洞窟の中で味わったものに比べ、この現実の時間の方が非現実なものにさえ感じられたのだ。

二日後、搜索は打ち切られ、発見救出されなかった日本兵の代りに採集された多くの遺骨と、そしてあの遺書をたずさえて北原は東京に還った。

生残り日本兵のキャンペーン記事は出来上らなかったが、社では発見された日本兵の遺書を代りの特種として扱うことに決った。

その遺書の配達人として、そしてかつて同じ海と密林に闘ったものとしての祈りをこめて北原は記事を書いた。

『G島の遺書。二十年ぶりに故郷へとどいた日本兵の

声』

と言う見出しで記事は紙面を飾った。

社では更に、同じ社の週刊誌にグラビヤと一緒にその特集記事を載せた。

東京まで持ち還られた遺書は、未だその受取人を見出せずにいた。

手帳の持ち主、遺書の書き手である石倉静雄の妻、博子。その子供、洋一、寛二の三人がどこかにいる筈だった。

社では、かつての軍籍簿を基に、疾風兵団二〇六部隊、石倉静雄の本籍から調べたが、遺族の居どころはすぐにはつかむことが出来なかった。必然、特集記事の最後は、尋ね人の形になった。

「見つかるだろうか、遺族が」

東京に戻ってすぐに遺書の受取人を見出せぬまま焦って言う北原に、

「遺族三人が空襲で死んでいる、と言うこともあるがなあ、それにしても縁戚のものなり、誰か現れるだろう」

部長は言った。

「遺族三人が、空襲で死んでいる——」

それを想像しながら北原には何故かそんなことは絶対に許されぬことのように思われてならなかった。

「いや、いますよ。少くとも、二人の息子のどちらかは、生きていますよ」

なんの当てもないまま、部長へ抗うように北原は言った。

遺書受取人^{いしやうけとりじん}

G島から運ばれた遺書の受取人を捜す記事が週刊東日に載ってから数日し、東日新聞本社へ思いがけぬ人間が訪れた。

人呼んで鬼の松木という、来る秋の東京オリンピック大会に出場する日本女子バレーチームの総監督、松木英介だった。あるものたちからは気違い沙汰と言われた苛酷な訓練でこの三年間、現在までに二百十五連勝している史上最強といわれる女子バレーチームを作り上げ、オリンピックでの優勝には、全国民の祈りに似た期待がかけられている。

すでに巷では伝説的人物になっている松木が本社の玄関受付口に現れ案内を求めた時、受付の係員は慌てて運動部に連絡をとったが、彼が今日訪れた先は週刊誌の編集部だった。

通された応接間で、松木は応対に出た編集長に、自分が記事に出ていたあの遺書の書き主である石倉静雄^{いしかわ}に関りある人間だと告げた。

週刊から連絡があり、北原はデスクをたって松木のいる応接間に入った。

話し合っていた週刊の編集長が改めて北原を松木に紹介した。

初めてじかに見る松木は噂の印象とは違ってひどくもの静かな居ずまいに見えた。初対面の印象は、連日の苛酷な練習で彼もまた疲れているのではないかと見えるほどだったが、しかし物静かに唇を開くとき、相手に向けられる眼の色は他の誰よりも強く精気が感じられた。

「いや、この北原君も、彼自身G島にいたことがある
そうでしてね」

「ほう」

松木は微笑し、ゆっくりと視線を巡らし確かめるように北原を見つめた。